

第6節 野外活動指導法の場合

A 野外活動指導法Ⅰ（通称、山キャン）

はじめに

本活動の目的は、本学科の目標である「逞しい実践力のある教師の育成」のために、日常の生活から離れた自然の中で野外生活を行うことで、人間の生活の原点に戻り、自然の良さを再認識し、仲間の必要性を体験的に理解し、野外活動の指導をするうえでの基礎的な知識と技能を身につけることである。

舞台は、庄原市西城町にある広島県民の森キャンプ場である。実施時期は、9月初旬から中旬である。2009年度から教育実習Ⅶ（幼稚園）との関係で、中旬から初旬へと変更されている。いずれにせよ、山は夏から秋へと季節が移り、特に朝夕は10度前後まで気温が下がる。国定公園の中にあり、地型的に安全な場所である。1年のうち雨が降る日が200日以上あるらしいが、10年以上ここで過ごしたキャンプではそこまで雨に降られた感じはしない。しかもここ数年は快晴続きの天候である。もっとも天気の良いも悪いもない。晴れが多ければ野外活動は順調に過ぎ、暢気なものになりかねない。雨が降れば、いろんな点が不自由になるが、そこから学ぶことも少なくない。

本活動は、PDCAのサイクルで問題解決を図っていく学習活動という面も持つ。計画は天候や様々な事態によって修正される。常に動いている自然の中で、生きているお互いが学びあう場であるから、そのときでないと学べないことを最優先してより一層質の高い野外活動の学びとし、野外活動指導法の基礎を身につけることを大切にしている。

1. 履修登録から実施までの流れ

山キャンへの導入は、前期チュータタイムにおける活動の概要説明から始まる。履修登録後の第1回の説明会を4月末に行い、山キャンの概要を詳細に説明し、立候補制で実行委員を決定する。その後は、実行委員と教員とで次の全体会の説明資料を準備する。「活動の概要（原案）、食事計画、班編成の方針、班活動の設定など（以下、「活動概要など」とする）」である。

第2回全体会はその約1ヵ月後（5月末）に行い、上の「活動概要など」をほぼ決定し、次の準備に入る。各班は立候補や抽選で割り当てられた活動の準備を行い、冊子となる要綱（葉）の原稿（活動と班の自己紹介など）を約1ヶ月後（7月上旬）までに作成する。実行委員はそれ以外の「活動概要など」の原稿を作成することになる。活動プログラムは前年度を参考にしている。ほぼ固定されているものは、登山（2日目）、星座観察（2日目）、キャンプファイヤー（3日目）、早朝登山（4日目）である。これらを参考に実行委員と教員（担当）とで原案を決定し、形式的であるが、第2回の全体会で確認される。

活動要綱の冊子が出来上がる7月に第3回の全体会で、活動要綱をもとに日程などの詳細を確認する。夏休みに入る前で、しばらく集合がないので各班ごとに活動の打ち合わせを行う。

そして、山キャン出発の前日を迎える。寝袋を半日ほど天日干しし、集団行動の第一歩を歩み始める。集合時間に遅れることなく、集まったら点呼をとり、実行委員の指示で手際良く、指定された数の寝袋を倉庫から出し、グランドの簡易（移動）フェンスに架ける。（当日の打ち合わせの終了後に袋に戻して、翌日の積み込みのためにホールに持ち運んでおく。）その後、班の健康チェックや教員からの指導を入れ、心構えを整える。

2. 山キャンの活動組織

(1) 実行委員

活動の運営の中心となる実行委員は立候補で選出される。さまざまな学科行事があるので、できるだけ重ならないように多くの学生が実行委員を経験してほしいと願っている。「これまで人任せで人前に立つ仕事をやっていなかったから挑戦したかった」「オリゼミ委員で納得いく仕事ができなかったから」という理由で実行委員になる者もいる。実行委員会が当然中心となるが、全員参加による運営をモットーにしている。委員長は重責を担うので、委員長がどう決まるかは、学生にとっては関心の高いところであろう。しかし、委員長一人で運営するわけではないから教員はそこまで気にしていない。だから、教員による指名は行っていない。

多くの場合は、実行委員が10～12名程度立候補で決まり、そのあと相互の推

薦や立候補で委員長が決まっていく。多数決を採るということもなく、実行委員がお互いに適材適所を慮り、あうんの呼吸で委員長が決まっていくようである。副委員長は、委員長が決まったあと、相性の良い仲間が立候補して決まるようである。似ているというより対照的な性格で補うバランスの良さが大切であろう。

実行委員には、その他、会計係、食事係、保健係、物品係、燃料係、清掃係などがある。実行委員会が運営役で、他の学生はキャンプへの参加者であるという二重構造が起こらないようにすることが重要である。実行委員と学生全体がどのように有機的につながり、実行委員に仕事が集中しないように、仕事を分担しあい、「全員が全体の仕事が見える」ように工夫しないといけない。このことを事前に理解することはある程度はできるが、経験しながら理解するしかない面もある。全員が柔軟に臨機応変に最善策を創意工夫しながら4日間を意義のあるものにしていくために、事前の学習が欠かせない。

(2) 班編成(生活・活動班)

班編成の基準はいろいろあるが、普段の生活でまだ話したことがない学生同士もいることから、出来るだけいろんな学生と出会い、人間の幅を広げてほしいと願っているため、無作為で班メンバーを決めるように仕向けている。活動や野外生活などから5～6名がまとまりやすく活発になりやすいメンバーである。テントのキャパ(容量)もある。役割分担は、班長、食事係、保健係、物品係、燃料係、清掃係などがある。各係の実行委員と班の係とが、4日間の活動をシミュレーションしながら係の仕事を確認することが必要である。現地では毎夜の反省会で振り返りと改善を図っていく。

3. 山キャンの実際の活動

(1) 開村式・班旗作成・竹の箸作り

1日目	2日目	3日目	4日目
〈初日〉開村式・旗	朝の集い、野外炊飯	朝の集い、野外炊飯	朝の集い
竹細工、火起こし	登山、風呂、野外炊飯	レクレーション、自由時間	清掃、閉村式・絵日記
野外炊飯、反省会	星座観察、反省会	ファイヤー・キャンドル、反省会	3時、大学にて解散

開村式・班旗作成に続いて、マイ箸を竹で作成する。班ごとにお箸立ても工作する。スプーンや竹トンボを作成したこともある。

(2) 班活動

班は生活班であり、活動班である。寝食を共にする。1日目、開村式を終えて直ぐに、4日間の班の目標とそれを表現した旗の作成に取り掛かる。

(3) テントでの合宿生活

常設テントを利用し、生活・活動班は4日間同じテントで寝泊まりする。6人で多少ゆとりのあるスペースである。テント内での自由時間は、起床後と活動の合間はわずかな時間しかないが、夕食後から就寝前の時間は比較的ゆとりのある時間である。並行して代表者による反省会が行われてはいるが、夜は、2か所の炊事場しか電燈がないので、テント内で交流することで仲間意識が強まると思われる。

(4) 毎日の振り返り

夕食後は班で簡単な反省会を行い、実行委員全員と班の代表者（2名）が集まる全体反省会が行われる。初めに班の健康チェックが報告される。次に、その日の反省（課題や良かったことなど）が各班から出される。そのあと、実行委員からも同じく反省が出される。意見のやり取りも随時行われる。最後に、教員（複数）から反省に対するアドバイスや指導が行われる。1時間程度である。体調を崩す学生が出ることもあり、健康管理の情報や対策もその都度確認が行われる。学生の動きは日に日に向上していくので、初めは課題が学生相互に指摘されるが、2日目3日目と進むにつれ、課題が克服されていく様子が報告され、教員からの指導も学生の動きを褒めたり、さらなる発展を期して励ましたりすることが多くなる。課題は、5分前集合が滞りなく行われたい、トイレの使い方がよくない、炊事場の片づけがよくない等々。

全体の反省会はお互いの活動を見直し、明日の活動の目標や指針を確認する場であるので、野外活動の中で重要な場である。反省会は、学生・教員たちともに真剣である。この緊張感が野外活動の成功へとつながるものであり、それは実行委員と班と教員が一体となって作るものだと思う。

日没後しばらくすると、キャンプ場は夜の帳（とばり）に包まれて、冷気が肩に忍び寄ってくる。キャンプ場の炊飯場のみ蛍光灯がある。炊飯場の周囲に

は高い木々がそびえ、月明かりも届かない。炊飯場からテントサイトを見やっても暗闇に包まれている。そのなかで25人ほどが集まって緊迫した雰囲気の中、活発に意見を交換し合うという一種独特な世界を作り出しているようだ。お互いの真剣かつ和やかな雰囲気は心地良いものである。

(5) 野外炊飯

食事班は二つの生活班の組み合わせで編成されている。いろいろな班と組み合わせを行う。教員も一人は入るようにしている。後半は教員が離れることもある。4日間で7回の野外炊飯を経験する。野外活動の中で最も頻繁に繰り返し行われる活動である。初回は、理科教室で準備した火おこしを体験する。2回目以降はマッチを擦って、薪から火を焚いて調理を行う。手慣れた学生がリードしているようであるが、初めは教員の手助けなしには火がつかない班がほとんどである。薪の並べ方や小割の使い方を工夫し、火をおこすためには経験を深めないと難しいようである。薪は小割もあるが、鉋で薪を割って使ったりする。事前体験をしないで当日を迎えるが、出来れば事前体験をして、どの学生も火を起こせるようにすることが今後の課題である。

献立（メニュー）は例年のものを参考にしてはいるが、栄養バランスや調理方法の組み合わせなどを考えて改善する余地がある。ファーストフードを標準と考えたり、旬の食材を理解できていなかったり、栄養バランスを考えられない学生は少なくない。野外調理にふさわしい調理ということにも考えが及ばない学生もいる。家庭生活でどれだけ調理を経験しているかによって調理の行動も変わってくる。事前に時間的ゆとりがあれば、メニューコンテストを行うことも面白いかもしれないが、それは栄養士や栄養教諭の専門家にお任せする内容かもしれない。

(6) 朝の集い

朝の集いは、担当班にお任せであり、年によってメニューがいろいろである。体操は必ずあるが、ラジオ体操以外もよくある。班や教員のスピーチもある。21年度、朝から尻尾取りゲーム。目を覚まそうという発想はいいかもしれないが、多くの学生の動きはよくなかったのではないかと。今後は工夫の余地がありそうである。

(7) 登山

キャンプ場を含めて辺り一帯は、国定公園である。そして比婆山連山には国内でも有数の天然ブナ林がある。キャンプ場から片道2時間程度をかけて登山をする。山道を一列になって登るので、先頭と後尾では姿が見えず声も聞こえにくくなる。学生と教員が協力して、無線を利用して随時連絡を取り合う。途中、木陰で休憩をして、渴いたのどを潤したり、汗を拭いたりするが、列がしっかりと詰まっていないと、先頭と最後尾では休憩に入る時間がずれてしまう。先頭には登りに自信のない学生や体調がやや悪い学生が配置されるが、先頭に立つと調子が良くなるのかやや速足になるのが通例である。専門家でも同様のようである。

センターの職員の登山の専門家からは、休憩した時に、いろんな木について説明をしていただくこともある。この説明が全員に届くのは無理があるので、課題である。無事に全員が山頂に着き、周囲の山々の美しさに感動する。朝準備した握り飯をほおばり、しばらく体力を回復させる。帰りはほとんど下りである。全員の下山を確認し、班ごとに決められた入浴の時間を守り、県民の森センター内の大浴場で体を温める。洗髪は冷えて体調を狂わす危険があるので、注意するようにしている。

(8) 星座観察

星座観察の担当班がリードして観察が行われる。広い芝生の広場があるので、そこにビニールシートを敷いて座り込む。宇宙からのエネルギーを感じて、流れ星の響きを聴き、思い思いの願い事を星に託す。各班でオリジナルの星座を作ることもある。ある年には「運命座」という星座が作られ、学生の仲間意識が高まり、その影響は卒業まで続いたこともある。学年の花（たとえば、向日葵）が自然な流れで提案されたこともある。夏の星座の主なもの、大三角形、北斗七星、カシオペア、さそり座などが見ることができる。運よく、月齢が低く、月の無い時、しかも雲がない時、それは3、4年に1回程度であるが、まさに満天の星に感嘆する。逆に運悪い年は雨天を恨んだりもするが、自然に逆らえないことを再認識し、体育館で星座の話を開いたり、自分たちの星座を想像したりして仲間と時を過ごす。山キャンの中では、数少ない静寂のひとつまである。

(9) レク（ウォークラリー、自然観察、野外工作など）

班担当の時間であり、午前と午後の活動ができる。自然の恵みを生かした活動（ネイチャーゲーム）が主流である。草花のスケッチと草花当てクイズ、工作、オリエンテーリングなどが最近が多い。音楽的な活動はまだ行われたことはない。かつては運動会が行われていたこともあるが、最近の学生の体力不足からか復活の兆しは見られない。教員もほっとしているが。

(10) キャンプ・ファイヤー（キャンドル・サービス）

野外活動の最後の夜を送るのにふさわしいのは、やはりキャンプ・ファイヤーである。人類の歴史のなかで火は特別な意味を持つ。儀式によって火と自然への感謝を表現する。ファイヤーを囲んで仲間が集い、大いに楽しむ。教員もその輪に入る。班ごとの出し物で盛り上がりは最高潮となる。ピークの過ぎたファイヤーを囲み、暗闇の中で不思議な自然の神秘を味わいつつ、仲間を、生きることを振り返る。ファイヤーの木の組み方は、専門家に御指導いただいている。組んでいくときには学生も参加している。天候によっては、キャンドルサービスに変更する場合もある。その判断はぎりぎりまで待つことになるが、いずれにしても参加者全員が楽しめるひとときである。

(11) ご来光を仰ぐ早朝登山

キャンプ場から30分弱ほど登った展望園地で御来光を待つ。出発時は暗闇であるが、辺りは途中で白々とし始め、登頂した時には東の空は日の出前の明るさとなる。運の良い時は15分ほどすると感動に包まれる。雲に隠れて見えない時もある。山の生活は6時起床であるが、それより1時間早く起きて、普段の生活では得られない山々の向こうに美しく登る御来光を期待して早朝登山をしている。

(12) 全体清掃と片づけ

「来た時よりも美しく」をモットーにして、最終日の全体清掃が行われる。トイレも念入りに掃除する。黙々と働く姿ほど美しいものはない。文教の学生はよく働く。

(13) 閉村式

各班で反省の時間を持って4日間を振り返り、思い出が報告される。教員からは、4日間の振り返りやまとめの話が出される。実行委員への感謝の表現も

プログラムにはないが、毎年の恒例である。山キャンの成功を祈って苦勞を重ねて来た実行委員の目には涙がうっすらと浮かんでいる。そして4日間の野外活動を終えて成長を遂げた学生たちを見届ける教員も感動し、体力的な疲れはあるが、心の中はさわやかな風が吹いている。委員長を中心とした実行委員たちの働きぶりは見事である。毎年、真剣に向かう姿を見せる。頑張り過ぎから体調を崩す学生が出てしまうこともある。

4. 山キャンでの学び

参加学生の振り返りのレポート（2009年度）から、山キャンの学びを引用してみた。

（アンダーラインは筆者・杉山が、ポイントになることとして強調するために引いた。）

- ・ 最初はまったく慣れない生活で4日間を長いと思っていたが、2日目にもなると大自然って空気がきれいで星もたくさん見えて日頃気がつかないことに目が向くようになり、キャンプやレクなどに夢中になっていきました。
- ・ 山は朝晩とても冷え込むということや私たちは自然に生かされているのだということが、自然の美しさや厳しさに触れることでわかりました。だから自然保護や安全に留意しながら活動しようという態度を養えました。
- ・ 私は大の虫嫌いでしたが、この問題は山キャンのおかげですっかり解決できました。最初は小さな虫が出る度に叫んでいましたが、叫んでも叫んでも虫は出るので、途中から考えを変えて、いかに虫を気にしないかを意識するようになると、不思議と全く怖くなくなりました。少しの考え方の違いって何かを解決するのに大切なんだと思いました。
- ・ 鉈の使い方の指導法、火起こしの方法、飯盒での焚き方、登山の留意点、キャンプファイヤーの意義と方法など自分が身をもって様々な体験をすることで、基礎的な技能を修得しながら、実践的な指導法を学ぶことができました。
- ・ 集団生活の中での指導者への指示の仕方も、実行委員さんの姿を見て学び、さらに自分のものにしようと思いました。
- ・ キャンプファイヤーの井桁の組み方は、今まで一度もやったことがなかった

ので、実際に班のみんなで組んだり、説明を聞いたり知ったことでとても勉強になりました。

- ・ 4日間を通して、自分の中で少しずつ指導案が浮かんできました。もし、保育者の立場になったとき、自分だったらこんなふうに…とイメージが湧いてきました。
- ・ 人前で何かを説明するときは、きちんとした準備と段取りが必要だと思っていました。具体的に話すことが相手に伝わりやすいと、自分が受け持ったレクで分かりました。
- ・ 二班合同での炊飯のとき、材料を一つの班が全部使ってしまうというハプニングがあったが、そこで怒ったり、相手を責めたりするのではなく、どうしたらお互いが良いように解決できるかを考え、取り組むことができました。
- ・ やはり何事にも後ろ向きでの姿勢ではだめだなと思いました。最初から「無理」と決めつけるのではなく、「やってみよう」という探究心が重要です。
- ・ 山登りでは、もう絶対に無理って何回も思ったけど、みんながいるから最後まで登り切ることが出来たのだと思います。
- ・ やはり積極性は大切だと思いました。一人がやる気を出し、また一人がやる気を出す。この循環によって全体が一つにまとまり、目的をもって行動することが出来るのだと改めて感じる事が出来ました。
- ・ 集団活動を通してたくさんの問題に接してきたけれど、主に話し合いをすることで難なく乗り越えることができました。また助け合い協力して行うことで、どの班とも揉めずに無事に野外活動を終えることができました。
- ・ ミーティングで、その日の悪かった点を話し合い、どのようにすればその点が改善されるかを話したり、野外炊飯でどのようにすれば火が起こるかなど、みんなで考えて協力したりと問題解決をしようとする力が前よりも身についたのではないかと感じました。
- ・ 山キャンを通して、体調の自己管理の大切さ、10分前行動の大切さがよくわかりました。集団活動を通して規律を守り、仲間と協力して問題を解決していく力を育てながら参加し、山キャンの意義を理解することができました。
- ・ 野外活動の意義は日々の生活のすばらしさを感じ、他者がいることの大切さを知ることだと感じました。何もできなかった私も基礎的なことを学べまし

た。自分でやらなければ絶対に分からないポイントや難しさが知れたことで、実践的な指導を学べました。

- ・ 班のメンバーと本当に力を合わせられた。一人では出来ないと思うことも、メンバーでアイデアを出し、みんなの力で乗り越えられた。のほほんと生きていた私たちが頭と体を使い、他者との中で解決力を身につけられた。私にとって一番の収穫だった。
- ・ 人を動かすことに必死で協力することや力を借りることを忘れていた。自分の満足で終わらせてはいけない。周りの状況や様子を見て動くことの大切さを知った。
- ・ 活動を行う上で時間変更、場所変更など様々なことが生じたが、指導を行う者はどのような時でも冷静さ、周りとの連携、常に確認と情報交換が必要であると学べました。
- ・ 私は今回体調不良になり、活動する時間がとても少なかった。しかし、今回の経験で悔しいこともいくつかあったが、周りのためにも我慢をしない、体調が悪い時はしっかり休む、このことをこれから先教員になった時も子どもに伝えたいと思う。

おわりに～今後の課題～

まず、事前学習は時間割に組まれていない放課後を利用している。今後もその傾向は変わらないが、22年度からは「特別活動の研究」が3年後期から、2年前期の授業へと組み込まれたので、上で述べた山キャンを例にして実行委員や班活動の有機的な連携と活動のあり方について説明を加えること、また、専門家を招いて、野外炊飯、星座観察、キャンプファイヤーなどの指導をしていきたいと考えている。

次に、新型インフルエンザの流行や学生の体力不足から保健管理体制を今後は強化していく必要がある。合宿前に時間に追われて睡眠不足や体調不良で突入すると間違いなく発熱する。日常生活においても一人ひとりが体温計を持ち、健康を自己管理できる学生に育てないといけない。山キャンでは、女性教員2名の常駐、部分参加の教員も含めて、万全の指導態勢を敷く必要がある。野外

活動では、学生6～7名あたり一人の教員が標準であるとも言われる。大自然の中で事故や怪我人が出ないように、十全な指導体制を組んでいかねばならない。

最後に、具体的な課題として、食事メニューおよび朝の集いのプログラムがまだ確立していないことがあげられる。また、登山と自然観察の両立をどうするかということがある。後者については、キャンプ場のある県民の森センターと協議したい。前者については、過去の例を整理して、より良いものを考案していきたい。

(杉山浩之)